

学校でもない。家庭でもない。そのはざまの登校班だけを舞台に選んだ有沢のたくらみは見事に成功し、ユッキーの絶望を際立たせている。五年生のミサが転校し、来年の登校班の班長はまちがいなく自分になる。个性的すぎるメンバーたちは、自分の能力では收拾がつきそうもない。もう、絶望するしかないことになる。

一方で、ユッキーは、そんな班をきっちりとまとめている班長のかさねちゃんの「すごさ」に感心する。

かさねちゃんがすごいのは、オレたちに、リュウセイにさえ、一度も、うんざりって顔をしないとこだ。ちがうなほんとにすごいのは、どうもほんとに、かさねちゃんはぜんぜん、リュウセイにも、この班のメンバーにも、うんざりしないってこと。

オレなんかしょつちゅう、いろんなことにうんざりして絶望すんのに。

かさねちゃんが絶望を知らないはずはない。だってオレより一歳長生きしてるんだから。

リュウセイは個性派ぞろいのメンバーたちの中でも、とりわけ個性的な四年生だ。ユッキーによれば「一日おきぐらいに、五年のオレの教室にまでこいつのげつきようが聞こえるし、一週間に一回はバンソークーじゃ間にあわない

ケガしてるし、一週間に二回はケガもしてないのに先生二人がかりで保健室に引きずられてる。それで、たぶん毎日だれかを泣かすか自分が泣くかしてる。」ということになる。ユッキーは自分の絶望を解消するために、リュウセイが転校し、班からいなくなることを願う。

井上は、物語前半のこの「絶望」を「ユッキーの個人的な絶望」ととらえる。そして、物語が進むにしたがって、自分の周囲に確実に存在する「絶望」へと視点がむいていく。例えば、リュウセイの家をたずねて、ネグレクトしている彼の母と話したときに「時空がおかしくなった気がして」きたりと、次第に小学生の日常生活を覆う「絶望」が見えてくる。

物語の後半、リュウセイが保護されて、実家のおばあさんの家に引き取られることになったとき、ユッキーは、あれだけ願った「リュウセイの転校」を放棄し、リュウセイが班に戻ってくることを願うのだ。

班員のプレゼントをもって、かさねちゃんとふたりで、おばあさんの家にいるリュウセイをたずねた帰り道、ユッキーはかさねちゃんにきく。

駅前まで来て、オレは信号待ちで横にならんだかさねちゃんにきいた。

「かさねちゃんは、なんでリュウセイとうまくやれんの」